市町村のまちづくり

自動運転バス実験とまちなかウォーカブル事業について

― 茨城県境町 ―

境町建設農政部都市計画課　主事　　中 岡　玲 悟

1『自動運転バスが走るまち』

■はじめに

境町は、茨城県の県西部に位置し、埼玉県と千葉県に隣接する人口約２万４千人の町です。

南の玄関口に位置する「道の駅さかい」をまちなか活性化の拠点として、まちづくりを進めています。近年は、自治体初となる自動運転バスの運行など、最先端技術を取り入れた事業が盛んで、高齢者にも子育て世代にも快適に暮らせるよう整備に取り組んでいます。

①レストラン茶蔵

■自治体初自動運転バスの導入

かつての境町は、交通の要衝として繁栄したものの、時代の潮流により商店街は廃れ空き地や空き家などの遊休ストックが増加し、中心市街地から賑わいが消えていってしまいました。また、鉄道駅がなく、路線バスの本数も少ない、まちなかを周遊する循環バスもないことから、高齢者が免許証を返納したくてもできない環境にあるため「バス」を中心とした公共交通の充実が大きな課題でした。

バスの運行についても、今後運転手の担い手が不足していくことが想定されることから、サスティナブルな公共交通網を形成するため自動運転システムの導入を検討しました。その後、公道における自動運転バスの走行に関する要望書を国に提出し、自治体初となる自動運転バスの定常運転を開始しました。

さらに、境町－東京駅間を結ぶ直行便の高速バスが令和２年７月に運行を開始し、自動運転バスと高速バスターミナルを結合することで利便性が向上しています。

■地域の変化

自動運転バスを導入後、高齢者の方から「これで安心して免許の返納ができる」、「今は全自動でなくても近い将来、全自動運転になる明るい未来が見える」など前向きな意見を多数いただいており、病院や子育て支援施設など、定期的に利用する町民が増加しています。また、運行ルート上では路上駐車の減少や制限速度30㎞/hの道路をペースメーカーとして走行することでスピード超過の抑止力にもなっています。沿線住民からは本事業へのご理解・ご協力をいただき、店先等へのバス停設置を快く受け入れていただいています。

■今後の展開

今後も、町民のニーズに合わせ自動運転バスの運行ルートの順次延伸を予定しています。また、アプリを活用したオンデマンド運行を実施することで町民が「いつでも」自動運転バスを呼ぶことができるようになります。さらに、顔認証システムの導入やカーシェア・サイクルシェアと連結することで、利便性を向上させ、町民が安心して住み続けられる「誰もが生活の足に困らないまち」の実現を目指していきます。

②河岸の駅さかいと自動運転バス

2『有名建築家の建築物が建ち並ぶまち』

■粛餐寶美術館（S-Gallery）

道の駅さかいと河岸の駅さかいを結ぶ国道354号沿いに建築家の隈研吾氏が設計した「粛餐寶美術館」が新たに完成しました。当施設では、境町で晩年を過ごし「孤高の画家」と呼ばれ、芸術界に名を残す画家たちに学びながら独自の世界観を確立した『粛餐寶』の美術作品を展示しています。

③聖火トーチ

また、当施設では東京2020オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、令和3年6月26日、27日に聖火トーチの展示を行いました。

④粛餐寶美術館（S-Gallery）

■S-Lab・S-ブランド

隈研吾氏の設計による六次産業化を推進する研究・開発施設「S-Lab」が境町に完成しました。S-Labで開発された干し芋は、町の新たな特産品として地場産業の振興や雇用増加にも繋がっています。「S-ブランド」はS-Labで開発した干し芋をブランディングし、関連商品や、カフェメニューを提供する店舗として運営されています。

⑤S-Lab

⑥S-ブランド

■経緯

まちなかの周遊ルートには、隈研吾氏が設計したレストラン茶蔵や粛餐寶美術館、S-ブランドなど、数々の観光施設が点在しているが、これらを結ぶ道路に歩道がないことから、来訪者の安全確保が課題となっていました。そのため、まちなかウォーカブル推進事業の一環で、対面通行の道路から中央線を消去して路側帯を拡幅し、歩行空間を創出しました。そして、路側帯に案内誘導線を標示し、周遊ルートを歩いて移動する人が安心してわかり易く移動できるよう、施設と目的地までの距離を記した誘導案内シートを50m毎に設置しました。

■整備概要

所在地：国道354号線
　　道の駅さかい―河岸の駅さかい間
名　称：施設案内誘導設置工事
事業費：1,287千円
工　期：令和3年6月2日～令和3年6月30日

⑦誘導線・施設案内標示

■今後の展開

さかいリバーサイドパークがある利根川河川敷と町の観光交流施設等が集積しているまちなかを融合させるため、国道354号バイパス沿いの利根川堤防の小段を利用して遊歩道を整備しています。さらに、路側帯と同様にカラー舗装や矢羽根式の案内看板を設置して、わかり易くて回遊性のある歩行空間を整備していきます。

「道の駅さかい」を観光及び市街地活性化の拠点とし、まちなかへ人を呼び込む動線として新たな人の流れを作り出し、再びまちなかの賑わいを取り戻すため事業を推進していきます。